

試験日 : 2026 年 2 月 23 日 (月)

入試種別 : 大学院入学試験(4 月入学)博士後期課程 春期試験

学部・研究科: 文学研究科 東洋史学専攻

科目名 : 第 2 群 ④古典漢文

解答又は解答例

問一

【解答例について】当該問題は、受験生の史料読解能力を問うものである。採点は問題文を正しく読解し、理解しているかを踏まえて、総合的に評価する。以下に掲げる書き下し文・要約はあくまで解答の一例である。

(1)解答例

乾隆戊戌の歳、瓜州に河を浚すに南宋の官印を得、文に曰く「宿州州院朱記」。初め州院は何れの職爲るかを解さず。後に羅端良の『新安志』を読むに、乃ち知る、州毎に州院と司理院有り、みな刑獄の稱なり。州院は則ち録事参軍之を主る。司理院は則ち司理参軍之を主る。若し州升せて府と爲せば、則ち府院と稱す。『會稽志』に、録事参軍廨舎は府治の西南に在り、府院は焉に在り。司理参軍廨舎は府治の南に在り、獄は焉に在り。

(2)解答例

清の乾隆年間に瓜州で南宋時代の官印が発見された。そこにある州院とは、宋代には一つの州に、刑獄をつかさどる、録事参軍の州院と司理参軍の司理院の二つがあったことが、羅端良の『新安志』という地方志により判明した。また會稽志では、府庁の西南に州院、南に司理院があったという。

問二

【解答例について】当該問題は、受験生の史料読解能力を問うものである。採点は問題文を正しく読解し、理解しているかを踏まえて、総合的に評価する。以下に掲げる書き下し文・現代日本語訳・要点はあくまで解答の一例である。

(1)解答例

海寇鄭廣、莆、福の間に陸梁し、飄駛にして兵犀あり、亡命を雲合し、一もて百に當らざる無く、官軍の能く制すもの莫し。自ら「滾海蛟」と號す。詔有り捕うこと勿か

らしめ、命ずに官を以てし、福の延祥の兵を主どり、以て南溟に徴せしむ。延祥は帥閫に隸す、廣は旦望、府に趨くに、羣僚は其の故を以て、爲す所偏く賓次、與に立ちて譚る者無し。廣は鬱鬱として言う弗し。一日、晨に入り未だ衙ばざるに、羣僚、風簷に偶話し、或は詩句に及ぶ。廣、矍然として坐より起ちて曰く、鄭廣は癡人なるも、拙き詩あれば、之を諸官に白さんと欲す、可ならんや。衆耳を屬す。乃ち長吟して曰く、鄭廣に詩有り衆官に上す、文武は看來たるに總て一般なり、衆官は官と做り却て賊と做る、鄭廣は賊と做り却て官と做る。滿坐慚じ噓う。章以初は好みて此の詩を誦し、毎に曰く、今、天下の士大夫の鄭廣に愧ずる者多し。吾が儕、自ら警とするを知らざる可けんや。

(2) 解答例

海賊の鄭廣は、福建の莆田、福州の地域で暴れまわり、素早い行動力、かたくするどい武力をもち、亡命者たちあつめて、一騎当千の強さをほこったので、官軍はどうすることもできなかった。自ら「滾海蛟」と名乗っていた。招安の詔がくだり、官職に任じ、福州の延祥軍の兵をつかさどらせ、南溟方面を警備させた。延祥軍は福建の安撫司に属していたので、鄭廣は一日と十五日には府庁に出勤していた。しかし同僚たちは、彼が海賊出身であることから、よそよそしく、ともに立ち話するものさえなかった。鄭廣はふさぎ込んで黙っていたが、ある日の朝、府庁の職務がはじまる前、同僚たちが軒下でする何気ない話の中で、詩句の話題があがった。鄭廣はここぞと立ち上がってこう言った「鄭廣は粗野な人間ですが、拙い詩を諸官の方々にご披露したくぞんじます、よろしいでしょうか。みなが耳を傾けると、長ながと次のように吟じた。鄭廣は詩をつくり同僚にご披露する、そもそも文官武官の区別なく、官員となっても悪事をなすものもある、鄭廣は賊でありながら官員のつとめをなす。一同は恥じてわらいだした。章以初は好んで誦この詩を唱え、いつもこう言う。今、天下の士大夫の中には鄭廣に恥じるべきものが多い。わたしたちは自ら戒めるべきである。

(3) 解答例

「滾海蛟」なる二つ名をもつ福建の海賊の鄭廣は、のちに投降して、福州の延祥軍の兵官となった。毎月、福建安撫司庁に出勤していたが、同僚たちは、彼が武官で、しかも海賊出身であることから、差別冷遇していた。ある日、文化人の必須の教養である詩句を、鄭廣が披露した。それは、文官武官の差別をするべきではなく、また賊のような悪官もいれば、賊でありながら官員のつとめをなすものもいる。つまり「地位や出身で人物を判断すべきでない」という内容であった。世の中の知識人たちは、鄭廣の話によって恥を知り、自ら戒めるべきである。